

親世代から見た「他出子」認識と「他出子」本人の認識の差異

—浜松市天竜区佐久間町のA集落を事例として—

静岡文化芸術大学 船戸修一

1 目的

昨今、65歳以上が占める割合が半分以上になった集落を「限界集落」と呼び、その消滅可能性を煽るような論調が見られる。しかし、集落の年齢構成にかかわらず、「集落から転出した子ども（以下「他出子」とする）」が実家や集落に通うことによって将来的な集落維持につながることを示す研究が「限界集落論」の批判として提出されている（徳野 2010、2011）。

このような他出子に関する先行研究は、他出子の属性や居住場所、他出子が実家に通う頻度、他出子と実家・集落との関わり、そして他出子の帰郷意志などをもつばら集落に居住する親世代への調査から明らかにしたもので、「他出子」本人への調査によるものは少ない

そこで本報告では、浜松市の中山間地域である天竜区佐久間町にある A 集落（16 世帯、38 人）を事例として、この集落に居住する親世代から聞き取りした「他出子（集落から転出した子ども）」の帰郷認識と「他出子」本人による帰郷認識の差違を示し、その差違が生じる背景や理由を明らかにする。

2 方法

A 集落において全戸対象（16 世帯）の聞き取り調査を行った後、各戸の他出子全員に質問票調査を実施した。また、他出子だけでなく他出子の子どもにも質問票調査を実施した。さらに、近隣に住む他出子については聞き取り調査も行った。

3 結果

A 集落の他出子は、34 名おり、その約半分が車で片道 2 時間以内の距離（浜松市を含む静岡県西部と愛知県東三河）に住み、2 ヶ月に 1 回は実家に通っていることが分かった。さらに、この集落に居住する親世代では「帰郷する他出子は皆無」という認識であったが、他出子本人への調査によると帰郷意志を持った他出子がいることが分かった。そもそも帰郷意志を示す他出子がいたとしても、親世代には中山間地域に居住し続けることへの不安や諦観が根強くあり、他出子は帰郷しないものという断定的な推測が行われている。

4 結論

高齢化する集落維持のためには、他出子に注目し、集落外に拡大した家族機能を活用していくことが有効策になり得る。そのためにも、まずは親世代と他出子との帰郷をめぐる意思疎通のあり方を見直す必要がある。

文献

徳野貞雄,2010,「縮小論的地域社会理論の可能性を求めて：都市他出者と過疎農山村」『日本都市社会学学会年報』28:27-38.

——,2011,「集落の維持・存続の分析枠組み：『T 型集落点検』から見えてくるもの」『福祉社会学研究』8:25-41.